

無住国師の生死観

——『沙石集』を中心に——

笹田教彰

(佛教学大学)

I はじめに

無住が撰述した『沙石集』は、鎌倉時代の仏教界の動向や日本における仏教思想受容の特色を窺うことのできる貴重な作品として従来から注目されており研究も多い。たとえば大隈和雄氏は、撰者無住について「同時代の仏教の動向に強い関心をもちながら、一宗一派の主張にとらわれることなく、庶民への語りかけをつづける立場を守り通した例は他にないのではないだろうか。」⁽¹⁾と述べておられる。

確かに『沙石集』には、当時の信仰の実態を窺わせる豊富な説話が収録されており、仏教教学本来の立場と比較した場合、日本における仏教思想受容の実態を探ることができるように思われる。祖師の思想研究や教学史あるいは教団史など、これまでの主流であった研究と同時に、古代から中世へ、都市住民を中心に広く浸透していった仏教思想の具体的な姿を究明する上で、注目すべき作品であると指摘することができる。また無住と同時代の仏教界の動向や無住自身の仏法観も述べられているが、無住は教学的に明確な思想体系を構築していたわけでは必ずしもない

と見られている。無住の基本的な仏法観は、たとえば「末代は、大小・権実・顕密・禅教・聖道浄土の是非、偏執して、甘露の正法を滅せんとす」⁽²⁾と述べ、一宗一派の立場に固執し、他宗を誹謗中傷する態度を「偏執」として厳しく批判したことに特色がある。その上で「都て万行一門なり。心を得て行へば、何も隔て無し」⁽³⁾という立場から、仏法の基本である「三学」を必ず具足すべきであり、特に戒律を遵守すべきことを繰り返し述べている。

本論では、このような無住の基本的な考え方に留意しつつ『沙石集』巻九に収録された一つの遁世譚「妄執に寄るて魔道に墮つる人の事」をとりあげ、無住の生死観の特色を探っていきたい。

なお、本論では京都大学付属図書館蔵の『沙石集』を用いるが、『沙石集』の伝本について簡単に述べておきたい。⁽⁴⁾弘安二年（一二七九）から開始された『沙石集』の編纂は、翌年に一旦五巻までが完成したと見られているが、その後増補がなされ弘安六年（一二八三）に十巻本としてまとめられたようである。ただし無住はその後も加筆・削除等の改定作業を続け、京都大学付属図書館蔵（以下、長享本と呼称する）巻二には永仁三年（一二九五）の奥書を有しており、また神宮文庫所蔵本（以下、神宮文庫本と呼称する）巻第四末の奥書により無住晩年の徳治三年（延慶元年）（一一三〇八）まで改定作業が継続していたことが窺える。

現存する諸本は、古くは渡辺綱也氏により収録説話数の違いにより「広本系」と「略本系」に大別されてきたが、近年、小島孝之氏は、広本から略本へ改編・簡略化されたものであるという見通しの前提となる説話数の多寡というのは、必ずしも適切な分類基準とはなしいところがある、と指摘され、『沙石集』の成立に比重を置いた「古本系」（第一類十二帖本と第二類十帖本に分類）と「流布本系」（第三類十帖本と第四類五帖本に分類）に大別する新たな分類方法を提示されている。⁽⁵⁾ただし「古本系」に分類されている伝本も、十二帖本と十帖本では巻六以降の構成や収録

説話数を異にしており、さらに「流布本系」諸本には、長享本や神宮文庫本など、改訂年次を知ることのできる裏書を有するいくつかの写本類と江戸期の古活字本および整版本が存在している。

このように『沙石集』には成立の経緯を異にする多様な伝本が現存しており「その系統的整理は難渋をきわめる⁽⁶⁾」のは事実であろう。もちろん作品論を主眼とするのであれば、伝本の分類や系統分け、収録話数の異なりや説話配列の異同、巻ごとの主題ないし方向性等々は重要なテーマとなろうが、当時の仏教界の動向や無住自身の仏法観や生死観を検討しようとした場合、無住の基本的な考え方が首尾一貫していたかどうかを確認すれば十分であろう。大隈和雄氏は「経論を典拠としない説法を、聞き手に信じさせるためには、それが実際に起こった、疑う余地のない確かなことなのだということを、くり返し言わなければならなかった。」と述べておられるが、当然根拠となる事例は追加（加筆）されることもあり、一方主題が見えにくくなるような場合は削除されることとなる。問題は説話数の増減よりも無住がそこで何を主張したかったのかということであり、度重なる改定作業を通じて、それがどのように補強（あるいは改変）されていったのかを見極めることにある。

無住の思想を窺う場合、『妻鏡』や『聖財集』・『雑談集』など、晩年にかけての作品をも視野に入れるのは当然であるが、『沙石集』改定作業の特色の一つは、説話部分よりも無住自身の考えを述べる個所での補筆が多くなされていることであり、その意味でも長享本や神宮文庫本の研究がさらに進められるべきであると考えている。

そこで本稿では「古本系」十卷十二帖本の「米沢本」と「流布本系」の「長享本」の本文を比較し、無住の改定作業の一旦を明らかにしつつ加筆部分に注目していきたい。

II 「依妄執」 魔道ニ落タル人事」

①中比、ナニカシノ宰相トカヤ聞ヘシ、才覚モ優ニ、賢人ノヲボヘ有リケル人、出家シテ高野山ニ隱居シ、念仏ノ行ヲムネトシテ、真言ナントモ伺ヒテ、道心者ノ聞ヘ有ケリ。平生ノ願ニ、最後ノ念仏ノ数返ハ時ニヨルヘシ。正ク最後ノ十念ヲハ、ノドカニ心ヲスマシテ唱ヘ、第十ノ念仏一返ヲハ、殊ニ聲ヘ打チ上、思ヒ入レテノビノト申テ、臆テ引キ入ラハヤト念願シテ、願ノ如ク少シモ不違ハ、念仏シテ息絶ニケリ。其後一兩年有テ、同法ノ僧、物狂ハシク口走テ様ノ事云ヲ聞ハ、彼ノ入道ノ靈也。スガタコトバサシ少シモタガハズ。同法共、思ハスニ覺ヘテ、御臨終目出カリシカハ、決定ノ御往生トコソ、心安ク思アヘルニ、何カナル事ニテ、カクハ御座ソト云ヘハ、年来思ソミ、願シ事ニテ、十念ハセシカドモ、妄念ノ残りテ、往生モシソコナヒヌル也。其故ハ当世ノ御マツリコトノ濁レル事、常ニ心ニカ、リテ、我レ其ノ官ニ有テ、其ノ事ヲ引キ直サハ、サリトモ、是程ノ事ハアラジナンド、用ナキ事、ヤ、モスレハ、心ノ中バカリニ、人シレズ思ハレシ妄執ヲスレカタクシテ、カ、ルヨシナキ道ニ入レリトソ語リケル。

②世ヲ捨テ、深キ山ニスミ、実ノ道ニ入レトモ、思ヒソミヌル妄念ハ捨テガタキニコソ。マシテ塵勞ノ中ニシテ、心ニコリ妄縁ニ執着セバ、道遠カラン事無レ疑ヒ。サシモ賢人、道心有リト聞ヘシ上ヘ、其ノ執心モ世ノ為メ、人ノ為メ、利生ノ一分ニテモ有リヌヘシ。アナガチニ罪有ルヘシトモ覺ヘネトモ、実ノ道ニ入ル時ハ、法執トテ、仏法ヲ愛スルマデモ、道ノ障リ也。マシテ夢幻ノ世ノマツリコト、心ニカクルニモタヘヌ事ヲ、常ハ思ヒツ、ケン。イカテ觀念ノ心モ乱レサラシ。念仏ノサマタケニモ成ルヘシ。無レ由道ニ入リケン事モコトハリ也。

サレハ人ノ臨終ハ知リカタキ物也。

③常州ニ、眞壁ノ教佛房トテ、明遍僧都ノ弟子ニテ、道心者ト聞ヘシ高野聖也ケリ。人ノ臨終ヲ、ヨシト云フヲモ、イサ心ノ中シラズトゾ云ケル。又高野ニ有リケル古上人ハ、弟子アレハ、往生ハセンズラン。後世コソヲソロシケレトソ云ケル。子息弟子ナンドハ父母師長ノ臨終ノアシキヲモ、有リノマ、ニ云ンモ、カワユク覺ユルカニテ、ヨキ様ニ云ヒナス。由無キ事也。アシクハ有ノマ、ニ云テ、我モ丁ニ訪ヒ、ヨソマデモ哀レミトブラワンコソ、亡魂ノ助スカル因縁トモ成ベケレ。

④末代ハ、多ク往生トノミ云アヘリ。惡人ノ中ニ、稀レニ臨終ヲダシケレハ、是ヲ見テ、惡人モ臨終ヨシ、惡業ヲソルヘカラス、ト云フ見ヲヲコシテ罪ヲ恐レス、恚マ、二三惡四趣ノ業ヲノミマス事、世ニ多シ。濁世ニハ多ク魔往生アルヘシト云リ。惡人ナレトモ、心ヲ改テ、十念成就シ、宿善開發シタランハ、実ニ往生スヘシ。宿善モナク、正念ニモ住セザル人ノ如キハ、往生トノミ申シアエラン、心得ガカシ。惡人モ心ヲ翻シテ往生センハ、教文ノユルス拠也。惡ト云フヘカラズ。善人モ妄念アテ、臨終アシキ事有ルヘシ。此レ又、善業ノアシキニ非ス、妄心ハツヨク善業ハヨハキ故也。此理ヲ信シテ因果ヲ乱ルヘカラズ。

⑤高野ノ遁世聖共臨終スル時、同法ヨリアヒテ評定スルニハ、ヲボロケニ往生スル人ナシト云リ。或時、端座合掌シ、念仏唱ヘテ引入タル僧有リケリ。是レコソ一定ノ往生人ヨト沙汰シケル。或ル上人ハ、是レヲモ往生ト定メカタシ。其故ハ実ニ来迎ニ預リ、往生スル程ノ者ハ、日此アシカラン面モ、心地ヨキ気色ナルヘキニ、眉スデ、ガヒテ、物スサマシゲナル面サシ也。魔道ニ入りヌルヤトゾ申サレケル。一兩年ノ後ニ、人ニ託シテ魔道ニ落タル由語リ侍リケリ。彼ノ上人カシコク見トガメラレケリ。

⑥又高野ノ上人ノ遁世ノ事ヲ物語セシハ、第三重ニタチ入テ、実ニステタル人也。一ニハ、世ヲ捨ルハ安シ。オノツカラ貧クシテ、世ニモ捨ラレ、或ハ又愛別ノ悲ミモアリ、又思ノ外ノ事出来テ、世ニモ立チ交ハルヘキ事無クテ、世ヲ遁ルム事モ侍リ。二ニハ、身ヲ捨ル。是レモ思ヒステム非人ト成リ。飢寒ヲ忍ヒテシイテ行スレバ、身ハナラハシノ物ニテ、命ヲツク事有レハ、年月送テスガタ斗ハ捨タル物也。第三ニ、心ヲ捨ルト云ハ、五塵六欲、名聞利養、曾テ心ニカムラス、執心執着無クシテ、浮世ヲ夢ノ如クサトリ、身命ヲ幻ノ如ク思テ、心ノ底ヨリ倦キ、心ヲ捨ルト云也。此心ニテ念仏修善ヲモ不懈、或又観念坐禅モ深ク思ヒ入り、出離解脱ノ道ハ物ニサヘラレズ、悪処ニ縛セラレヌ道人也ト語リキ。当世ノ遁世、多クハ第一ト第二重トハ見ヘ侍リ、第三重ハ希レナルニヤ、遁世ノ人ノ中ニ、随分ニ仏法ヲ学シ、坐禅観念スル人モ、偏執多ク、法門ニ付テモ、振舞ニ付テモ、是非我相ウスシトモ見ヘヌ事ノミ侍ルヲ申ス、澆季ノ習ヒナラシ。迦葉仏ノ在世ノ国王ノ十夢ノ中ニ、大像ノ窓ヲ出ル、身ハ出テツム、猶ヲ、尾ニカムヘラレテ出ヤラヌト見テ、仏ニ問ヒ奉リシニハ、釈迦仏ノ遺法ノ弟子、出カタキ家ヲ出タリト云ヘトモ、猶ヲ、名利ノ為ニ出離セザラン事トコソ、アワセ給ヒケレ。マメヤカニ名利ヲ捨ルコソ、隠遁ノ形、出家ノ姿ナナレ。サレハ佛道ニ思ヒ入ラハ、此心ヲエテ、実ニ遁ルヘシ。古人ノ詞ニハ、鈍ナル者ハ、財ト色トヲ愛シ、利ナル者ノハ、名ト見トニ着スト云ク。此ノ故ニ、或世ヲ捨タルスカタヲカヘリテ、名聞ニスル人モ有リ。或ハ徳ヲカクスヨシニテ、放逸ナル者ノモ有リ。能々心行ヲ察、名利ノ穴ヲ出テ、執着ノ氷ヲトクヘキヲヤ。

これは長享本『沙石集』巻九の八「依妄執ニ魔道ニ落タル人事」の全文である。引用中網掛けを施した部分は米沢本『沙石集』の本文から改定増補された個所である。便宜上、本条の内容を六つのプロットに分けているが、本条に

おける論説の中心と言える「高野上人」の遁世に関する言説を述べる⑥の部分では、たとえば『往生要集』大文第九末にも引用されている『俱舍論』卷九所収「訖栗枳王の十夢」が引用されているが、米沢本では「在世の国王の十夢の中に」となっている個所が「迦葉仏ノ在世ノ国王ノ十夢ノ中ニ」と修正されている。訖栗枳王は迦葉仏の父とされているので、改定の際に米沢本文の不備を補っていることが窺えよう。このような細部に亘る修正は枚挙に暇ないが、この個所では論旨全体も大幅な加筆修正がなされていることが窺える。冒頭にも指摘しておいたように、無住の思想を検討する場合、長享本や神宮文庫本の増補部分が重要な手掛かりとなるのである。

ところで、本条を納める巻九（古本系では巻十本）は、無住の理想とする「真の道心者」＝遁世者に関する説話が集められているのが特色である。「遂に終り目出く往生」した浄土房に始まり、「一期の栄花は久しからず。当来の快樂をこそ願ふべけれ」と発心・遁世し「臨終実に出く、既に終わりにけり」と伝えられた吉野執行、「終り乱れず」と伝えられた宋春房、一門で遁世した丹後国の俗士、隠居して「二心なき貴き上人」と評された観勝寺上人、後世の「三人法師」を彷彿とさせる強盗という悪行を契機とした発心・遁世譚、さらに「臨終目出くして終られにけり」と伝えられた証月房、「臨終正念の事を思ひ、聖衆来迎の儀」を願って始められた丹後国の迎講の事例が紹介され、そして最後に、唯一往生に失敗した事例（本条）を配置しているのである。⁽⁸⁾その概要は以下のとおりである。

道心者として評判の高かった高野の某の宰相は、平生の念願どおりの臨終を迎え、同法からも決定往生と思われるが、心中の妄念により魔道に堕ち往生できなかったという説話と、そのことに関する無住の考えが述べられる部分（①・②）。「人の臨終は知りがたきもの」という言葉をうけ、傍目には「往生」と見られる事例も実際は往生したかどうか疑わしいことを示す具体例を挙げる部分（③・④・⑤）。高野上人に言説を引用しつつ、名聞利養への執着を

捨て去り、真の道に入るべきことの重要性が述べられる部分（⑥）である。すでに述べたように、この⑥の部分は大幅に加筆されており、「遁世ノ人ノ中ニ、随分ニ仏法ヲ学シ、坐禅觀念スル人モ、偏執多ク、法門ニ付テモ、振舞ニ付テモ、是非我相ウスシトモ見ヘヌ事ノミ侍ル」と記されているように、理想とすべき遁世者のなかにも、「偏執」が蔓延してきていることが窺えるのである。

また特に注目したいのは、往生の当否に関して、往生際の面相を中心とする「善し悪し」について関心が集中していることである（③・④・⑤）。とくに「悪人往生」に関しては、往生の確たる証拠が、まさに臨終の穏やかなさまを根拠に主張されていることが窺えることである（稀レニ臨終ヲダシケレハ、是ヲ見テ、悪人モ臨終ヨシ、悪業ヲソルヘカラス）。

殺生や肉食といった破戒行為を改めず、善根は微塵もないようないわゆる悪人が、発心して往生を遂げるという話は平安時代末期より登場し、無住も指摘するように鎌倉時代における仏教界の動向として耳目を驚かすようになっていたのである。しかしながら、ではそのような悪人が往生したという確かな「証」とは一体何であったのか。古本系の『沙石集』にはまったく見られず、流布本系諸本に見られるこの一文は、まさに穏やかな死を遂げたことが、往生の証である⁽⁹⁾と見られていた事実を確認することができるのである。しかしながら、一方で端坐合掌して臨終を迎えた高野の上人は、同法から往生と認められたが、苦悶の表情を浮かべていたことから、魔道に堕ちたと判断されているのである。しかも長享本では古本系には見られない「一兩年ノ後ニ、人ニ託シテ魔道ニ落タル由語り侍リケリ。彼ノ上人カシコク見トガメラレケリ。」という一文が加筆されており、信憑性を高める結果となっていることが窺えよう。悪人が穏やかな死〓往生を遂げ、修行を積んだ聖が魔道に堕ちてしまうのはなぜか。善因善果・悪因悪果という仏法

の基本を厳守せんとする無住のアボリアはここにあったと言えよう。

III 「臨終正念」重視の動向

『往生要集』大文第六に説かれ、二十五三昧会（八箇条起請・十二箇条起請）で実践されていた臨終行儀は、臨終の病者を助けて最後の十念を成就せしめ、往生を遂げさせることを目的としていた。その意味で往生人のまさに死に際を注視することを特色とする儀式であったと言えよう。平安時代後半には僧侶や貴族の間で臨終行儀が浸透していくこととなり、『往生要集』の「臨終行儀」の内容を凝縮した「臨終の作法しるしたる文」も流布していたようである。また平安時代の末期から鎌倉時代にかけて、中川実範の『病中修行記』、覚鑊の『一期大要秘密集』、湛秀の『臨終行儀注記』、貞慶の『臨終用意事』、良忠の『看病用心鈔』など、能家のための臨終行儀のテキスト類が作成され、実践されていった。⁽¹⁰⁾中でも覚鑊の『一期大要秘密集』には、第九条に、『守護国界主陀羅尼經』巻第十を引用して、地獄（十五相）・餓鬼（八種之相）・畜生（五種相）の三惡道へ堕ちる面相・身体の特徴を列記しており、万一身の臨終にそれらの相が現じたならば、「追修之善根」を植え、「菩提之果実」を授けよと述べている。⁽¹¹⁾このように臨終行儀とは、臨死者の表情を含めた臨終の様態を凝視する作法だったと言えるだろう。

一方、『日本往生極楽記』撰述以後、平安から鎌倉にかけて編纂された往生伝類には、臨終の奇瑞が列記されるなかで面相や身体的特徴を挙げる事例が散見される。たとえば『日本往生極楽記』延暦寺座主僧上増命の条には「今夜金光忽照 紫雲自聳 音楽偏空 香氣満室 和尚礼拝西方 念阿弥陀仏 焼香倚几 如眠氣止⁽¹²⁾」とあり、光明・紫雲・音楽・香氣といった、代表的な臨終の奇瑞が列挙されているが、その終焉は眠っているかの如くであったことが

記されている。同様の事例は、『拾遺往生伝』巻上、阿闍利維範「端座向西 口唱弥陀如来宝号（中略）如眠氣絶⁽¹³⁾」、同巻上、外記入道寂禅「登于礼盤（中略）乍擎香炉 如眠入滅⁽¹⁴⁾」、同巻中、前常陸守源経隆「心身不乱 称念不断 顔色如眠 奄然氣絶⁽¹⁵⁾」、同巻中、尼妙意「又勸僧徒 念仏合殺 唱念仏間 如眠而終⁽¹⁶⁾」、同巻下、鞍馬寺根本别当峰延「安住正念 帰向西方 観阿弥陀仏 如睡遷化矣⁽¹⁷⁾」、同巻下、前権律師永観「頭北面西 正心念仏 如眠氣絶⁽¹⁸⁾」、同巻下、円空上人「合掌当額 十念之後 三度開眼 奉瞻仏像 如眠而終⁽¹⁹⁾」、『後拾遺往生伝』巻上、侍従所監藤原忠季「自起沐浴 端座念仏 黄昏時至 北首而卒 顔色如眠⁽²⁰⁾」、同巻中、書博士安部俊清「如眠氣絶⁽²¹⁾」、同巻中、入道忠犬丸「向西端座 口唱念仏 手結定印 如眠終焉⁽²²⁾」、同巻下、散位源伝「向西称念 身心不乱 如眠氣絶⁽²³⁾」、同巻下、物部時宗「時宗身心不動 正念安住 如眠死去⁽²⁴⁾」とあり、さらに『念仏往生伝』所収比丘尼青蓮も「取五色糸唱名号（中略）即十念十礼也 其後□念仏三十返 如眠氣止⁽²⁵⁾」と記されている。眠るように逝去すること、それが「正念安住」、つまり往生の証であったのである。

また事例は少ないものの、死後、容顔が変化しなかったという奇瑞も散見される。たとえば『拾遺往生伝』巻中、射水親元「寂而氣絶 其閉眼之後 容顔無変 念仏之唇 数刻猶動⁽²⁶⁾」、同巻中、前阿波守高階章行母堂「念仏氣絶 容顔無変⁽²⁷⁾」、同巻下、砂門永快「高唱弥陀尊 専行礼拝（中略）座合掌 顔色不変⁽²⁸⁾」、同巻下、備中国定秀上人「更令諸僧合殺 自持香炉（中略）寂而入滅 顔色不変 温氣猶残⁽²⁹⁾」。『後拾遺往生伝』巻上、上人永暹「手結定印 身亦結跏 容顔不変 威儀不乱 端座而終⁽³⁰⁾」、同巻上、記吉住「顔色不変 容色如眠 憑几而居 向西而化⁽³¹⁾」、あるいは『高山往生伝』律師行意も「向弥陀像 唱其宝号 定印不乱 奄然告别 氣絶之後 容色不変 往生之相 誰生疑殆⁽³²⁾」と記されており、臨終から死後にいたるまで容顔不変であったことが、「往生の相」と理解されていたのである。

眠るがごとくに死を迎えるということ、換言するならば苦痛に悶絶することなく安らかな死を迎えるということが、なによりも往生の証と理解されていたことが窺えよう。このような浄土信仰が受容されていくなかで、先に引用した「臨終ヲダシケレハ、是ヲ見テ、悪人モ臨終ヨシ、悪業ヲソルヘカラス」という言説が横行していたのであろう。『沙石集』に収録された「妄執に寄りて魔道に墮つる人の事」には、浄土信仰の実態を踏まえつつ、無住自身の抱く深刻な問いかけを垣間見ることができるのである。

IV 無住の生死観——結びにかえて——

無住とはほぼ同時代に活躍した親鸞は『末灯鈔』のなかで次のように述べている。

まず善信が身には臨終の善惡をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴无智の人もをはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとにまふされ候ける、すこしもたがわず候なり。⁽³³⁾

ここに言う「をはりもめでたく」とは苦痛に悶絶せず安らかな死を迎えるということであつたとみて差支えないであらう。信心が決定した者は阿弥陀如来の御計らいでめでたき臨終を迎えることができる故、臨終の良し悪しなどとは問題にならないという、その論旨は明快であるが、この言葉の背後には、阿弥陀信仰によってめでたき臨終を迎えたという信者の切実な願いがあつたことが窺えよう。換言するならば、信心が決定しているにも関わらず「をはりもめでたく」ないのはなぜか、という素朴な疑問があつたということである。

親鸞の師である法然も「往生浄土用心」に次ぎのように述べている

やまひもせでしに候人も、うるはしくおはる時には、断末魔のくるしみとて、八万の塵勞門より、无量のやまひ身をせめ候事、百千のほこ・つるぎにて、身をきりさくがごとし。（中略）これは人間の八苦のうちの死苦にて候へば、本願信じて往生ねがひ候はん行者も、この苦はのがれずして、悶絶し候とも、いきのたえん時は、阿弥陀ほどのちからにて、正念になりて往生をし候べし。臨終はかみすぢきるがほどの事にて候へば、よそにて凡夫さだめがたく候。ただ仏と行者との心にてしるべく候也。⁽³⁴⁾

これは病にかかつて死ぬのであれば、できるだけ症状の軽い病氣にかかりたいと願う信者の思いに答えたものであるが、断末魔の苦しみはなんびとも免れることができないことを明確に示している。

たとえ死に際に悶絶しようとも、信心決定によって、あるいは平生の念仏によって必得往生を説く法然や親鸞の立場は明白であるが、信者側にはめでたき臨終を迎えたいという強い思いが存していたのである。無住はこのような法然や親鸞と同じような現実を見据えつつ自らの結論を導き出していたと言えよう。立派な道心者でも往生できない理由とは、まさに臨終の妄念であつたのである。しかも冒頭に引用したように「末代は、大小・権実・顯密・禅教・聖道淨土の是非、偏執して、甘露の正法を滅せんとす」として批判し続けた「偏執」は、II⑥で示した加筆部分からも明らかのように、理想の道心者として無住が高く評価していた当時の遁世者の中にも蔓延してきていたのである。平素「偏執」を省みない者が臨終の妄念を抑えることなどできるはずがないわけであるから、平素から名利への執着および是非偏執の態度を改めるよう努力すべきであるというのが無住の考え方であつたと言えよう。

無住は『沙石集』全体を閉じる巻十に「めでたき臨終」を遂げた人々を収録しているが、無住の根本的な考え方である偏執を断ち切るということが「めでたき臨終」つまり往生することのできる方法だったのである。無住の生死観

の特色はまさにこの点に認められると言えるだろう。

註

- (1) 大隅和雄『信心の世界、遁世者の心——日本の中世2』（中央公論新社 二〇〇二年）
また主要研究書として大隅和雄『中世 歴史と文学のあいだ』（吉川弘文館 一九九三年）、安田孝子『説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集』（和泉書院 一九九七年）、小島孝之『中世説話集の形成』（若草書房、一九九九年）、片岡了『沙石集の構造』（法蔵館 二〇〇一年）など参照。
- (2) 小島孝之校注・訳『新編日本古典文学全集』五二『沙石集』（小学館、二〇〇一年）五六四頁。
- (3) 同右
- (4) 拙稿『「沙石集」の一考察』（佛敎大学『文学部論集』九〇号所収）参照。
- (5) 前掲註2
- (6) 同右
- (7) 京都大学付属図書館蔵『沙石集』巻九 二四帖ウー二八帖オ。引用に際しては適宜句読点を任意で施した。また原文のカタカナ表記は大小の文字が使い分けられているが、同じ大きさに統一した。
- (8) 前掲註4『「沙石集」の一考察』参照。
- (9) この一文は渡辺綱也校注『日本古典文学大系』八五『沙石集』（岩波書店 一九六六年）の本文頭注および拾遺、前掲註2本文の頭注部分にも記載されていない。
- (10) 拙稿『「看病用心鈔」の一考察——身とりの意義と善知識の役割をめぐって——』（『三上人研究』所収）。
- (11) 『興敎大師全集』下巻 一、二二七頁ー一、二二九頁。なお、『守護国界主陀羅尼經』の当該部分は巻十（『大正新修大蔵經』十九卷 五七四頁）。
- (12) 『往生伝・法華験記』（『日本思想体系』『往生伝・法華験記』岩波書店 一九七四年）五〇三頁。
- (13) 同右 五九三頁。

- (14) 『往生伝・法華験記』註12 五九八頁。
(15) 同右 六〇七頁。
(16) 同右 六一一頁。
(17) 同右 六一五頁。
(18) 同右 六二三頁。
(19) 同右 六二四頁。
(20) 同右 六四七頁。
(21) 同右 六五八頁。
(22) 同右 六五九頁。
(23) 同右 六六四頁。
(24) 同右 六六五頁。
(25) 同右 七〇六頁。
(26) 同右 六〇九頁。
(27) 同右 六一〇頁。
(28) 同右 六一五頁。
(29) 同右 六二〇頁。
(30) 同右 六四九頁。
(31) 同右 六五一頁。
(32) 同右 六九九頁。
(33) 『真宗聖教全書』二 六六四頁。
(34) 『法然・一遍』（『日本思想大系』十『法然・一遍』岩波書店 一九七一年）一六九頁。

本稿は二〇〇九年度 日本佛教学会学術大会（九月一六日 於立正大学）における発表を基にしたものである。発表の際、

龍谷大学の川添泰信先生、相愛大学の紅媒英頭先生から懇切なるご指導を頂戴し、また発表終了後、高田短期大学の金信昌樹先生より多大のご教示を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

